

目的 ヒトの一個体の中には、健康と不健康の両面が共存し、われわれは不健康な面が表出しないような環境条件を整えることに注意を払い日常生活をおくっている。本研究では、誕生時から成人までの成長過程を通して、着装と健康がかかめつた要因を、教育学部生が自己認識しているか知ることとを目的に研究をすすめた。

方法 対象：本学教育学部生245名，男女各100名と抽出。時期：昭和58年9～10月。方法：アンケート調査，同内容についての記述報告書。育児者からの聴取り，写真分析など自己認識，意識確立のため，アンケート調査前予備調査期間を3ヵ月とった。内容：略

結果 1)現在の着装状況は5段階尺度平均で2.97，男2.79，女3.00で，中庸着④のほか、男に薄着③，女に厚着⑤の傾向があった。2)着装の理由は，健康への配慮が，いずれの着装も高率であるほか、③の63.9%が動き易さをあげ、⑤の77.00%が、寒がりをおいあげた。3)着装の開始別では，乳幼児期は育児者の方針，小学，高校時代は健康への配慮，中学時代は理由なし，大学時代になつてからは動き易さが主たる理由であった。4)着衣に対して自己主張しはじめた時期は，女が男より早く，小学校高学年までに女は男の2倍となった。時期が遅くなるにつれ④の増加，③の減少傾向があった。5)着装による健康への効果は③は身体的効果をおいあげ、⑤は精神的効果が大きであった。6)寒さの症状の訴えは、③と④は約50%で、⑤と⑥65.12%、⑦非厚は88.89%と増加した。7)気候別には、風が強いと感じているものが症状ありとする比率が高く、女が男の3倍で、内容は手足の冷え、足腰の冷えが多かった。8)④は小学時代に着装に留意したとある比率が高かった。